

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22792213

研究課題名(和文)慢性疾患患児を育てる親のストレス・コーピング構造の変化に関する縦断的研究

研究課題名(英文) Stress-coping structure among mothers of children with chronic condition: a longitudinal study

研究代表者

扇野 綾子 (ohgino, ayako)

弘前大学・保健学研究科・助教

研究者番号：70400140

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：慢性疾患患児を育てる母親の心理的適応の変化について明らかにするために、質問紙調査を行った。健康な子どもの母親と比較した結果、慢性疾患のある子どもの母親は精神的健康がよくないものが多く、レジリエンス(心理的に柔軟な強さ)も低いことが明らかになった。また、子どもの入院中と退院後の継続比較が行えた母親は3名であり、精神的健康が改善している母親が3名中2名であった。今後も調査を継続していく予定である。

研究成果の概要(英文)：This questionnaire survey was conducted to know the change of stress coping among mothers of children with chronic condition. Results showed that mental health of mothers of sick children was worse than that of mothers of healthy children, and also in regard to resilience which indicate psychological flexible strength.

As longitudinal study, stress coping of 3 mothers compared when their child in hospital and when their child out of hospital. About 2 mothers, mental health was improved after their children were discharged hospital.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：看護学

1. 研究開始当初の背景

小児期の難治性疾患の救命率は著しく向上し、長期生存者としての慢性疾患患児とその家族のQOLが注目されている。看護学領域でも小児がんの親のコーピングが検討されるなど知見が得られつつあるが、多くは横断的研究であり、入院中あるいは外来という限定された状況下での家族の心理状態が理解されるにとどまっている。そこで、本研究は慢性疾患患児の親のストレス・コーピング構造を縦断的に研究し、経時的な変化を明らかにすることを目的とする。さらに健康児の親の心理状態と比較することにより患児の親の心理的適応を明らかにする。これらることによって、子どもの入院中から退院後まで、家族の変化を包括的に考慮した家族支援への示唆が得られると考えた。

2. 研究の目的

(1) 慢性疾患患児の親のストレス・コーピング構造を縦断的に研究し、構造の経時的变化を明らかにする。
(2) 慢性疾患患児の母親のストレス・コーピングを健康児の母親のストレス・コーピングと比較することで、その特徴をより明確にする。

3. 研究の方法

(1) 概念分析と概念枠組みの検討

慢性疾患をもつ子どもの家族の心理的適応に関する文献検討を深め、概念分析を行った。その結果をもとに概念枠組みを作成した。

(2) 調査票の作成

作成した概念枠組みをもとに、調査票を作成した。調査内容は基本属性、育児状況の他、精神的健康(GHQ28 日本語版)、コーピング(TAC-24)、レジリエンス(森他、2002)から構成した。

(3) データ収集

作成した調査票を用いて慢性疾患患児の親の心理的適応についてのデータを収集した。対象者は以下の通りである。

入院中の子どもの母親

長期的に入院している子どもの母親を対象に調査を行った。

退院後の子どもの母親

の母親について、子どもが退院した後、外来にて2回目の調査を行い、縦断的データを得た。

また、同時に小児科外来に継続的に通院している子どもの母親から同様の質問紙によりデータ収集を行い、横断的データを収集した。

健康児の子どもの母親

の横断的データと比較する対照群として、同一地域の保育所、小学校、中学校を通して健康児の母親のデータ収集を行った。

(4) 分析方法

記述統計の他、群間比較のためにパラメトリック検定を行い($p < 0.05$)、慢性疾患患児の母親の心理的適応についてその特徴を検討した。

また、慢性疾患患児の母親及び健康児の母親について、共分散構造分析を用いてモデルを検証した。

4. 研究成果

(1) 概念分析の結果

慢性疾患患児と家族のストレス・コーピングに関する文献を再検討した。なかでも困難な状況からの回復力である「レジリエンス」の概念は近年看護学や心理学、精神医学の分野で注目されており、本研究においても非常に重要な概念になると思われた。そこで、L.O.Walker と K.C.Avant の方法に基づきレジリエンスの概念分析を行った。その結果レジリエンスを定義付ける属性として、逆境からの跳ね返り、ポジティブであること、柔軟性の3つが明らかになった。

(2) 対象者に関する検討

研究代表者が先行して行った慢性疾患患児の両親のストレスに関するデータを再度分析し、夫婦ペアでの検定を実施することにより、父親と母親の違いという視点で分析した。その結果、父親と母親では同じ病児を育てる環境であっても、コーピングに違いがあることが明らかになり、ストレス・コーピングには性差があることが確認された。そこで、本研究の対象者については性別を限定することとし、子育てにおいて中心的役割を担うことが多い母親を対象に調査を行うこととした。

(3) 縦断的調査の結果

入院中の子どもの母親 16 名からデータを得た。子どもの疾患は、小児がん、心疾患、腎疾患などであった。子どもの退院後、外来受診時に2回目の調査を行ったが、研究期間中に縦断的データが得られたのは3名であった。このうち子どもの退院後母親の精神的健康が改善した事例は2名であり、この2名は心の柔軟な強さ、回復力を意味するレジリエンスも向上していた。個人属性と合わせて考えると心理的ストレスの状態は、入院中の付添の有無や退院後の育児環境によって影響されることが考えられた。コーピングに関しては、下位尺度によって傾向が異なっていたが、3名とも退院後は「放棄・諦め」得点が入院中より低くなっていた。今後も可能な限りデータを集積させ継続的に分析していくことで、患児家族の看護に寄与するデータが得られると考える。

(4) 健康児の母親との比較

慢性疾患患児の母親 247 名と、健康児の母親 322 名の心理的適応に関する横断的データ

を比較した。対象者の平均年齢は 39.0±6.8 歳であり、子どもの平均年齢は 8.8±4.9 歳で、いずれも両群で有意差はなかった。子どもの疾患は多い順に、心疾患、アレルギー疾患、小児がん、腎疾患、神経疾患などであった。子どもに疾患がある母親では、専業主婦の割合が 31.6%であり、これは健康児の母親と比べて有意に高かった。また、子どもに疾患のある母親では、子どもの祖父母と同居している割合も 44.1%と高かった。家族内での育児のサポートが得られると答えた割合は、病児の母親では 80.2%、健康児の母親では 77.7%と両群に有意差は見られなかった。しかし、「家族以外の育児サポート」について「有り」と答えた割合は、健康児の母親では 64.6%に対し、病児の母親では 54.7%と有意に低かった。

各尺度の得点を比較した結果、慢性疾患患児の母親では GHQ28 の下位尺度「身体的症状」「不安と不眠」「うつ傾向」において高得点を示し、精神的健康状態が良くないことを示していた。また、GHQ 採点法により何らかの異常ありと判定された対象者の割合は、いずれの下位尺度でも病児の母親の方が多く、特に「不安と不眠」においては病児の母親群で 15.0%と有意に多かった。

また、レジリエンスに関しては慢性疾患患児の母親は「I AM」「I WILL/DO」因子において有意に低いことが明らかとなった。同様にコーピングでは病児の母親では「肯定的解釈」が低かった。

これらの心理的状态について属性による違いがあるか検討した。子どもの主な疾患別に検討した結果、神経疾患患児の母親では「不安と不眠」の傾向が有意に強く現れていた。また、病児の母親では「家族以外の育児サポートがある」と答えた群で精神的健康はよく保たれており、レジリエンスも有意に高かった。

母親の心理的適応に関連する複数の要因の関連を検証するために、共分散構造モデルを作成し、子どもの疾患の有無による多母集団で検討した。その結果、2 つの集団に適合する棄却されないモデルが得られた。モデルの適合の良さを示す GFI (Goodness of Fit Index) は健康児の母親で 0.985、病児の母親で 0.983 と 0.9 以上を満たしていた。パス係数の推定値を比較すると、母親の心理的適応を構成する因子は両集団ともに「自信」の影響が強く表れており、「楽観視」から「肯定的解釈」に有意なパスが確認された。さらに、特に疾患のある子どもの母親の特徴を検討すると「柔軟な力」を構成する「楽観視」と「こころのゆとり」のパス係数が高いことがいえた。

これらの結果より、慢性疾患患児の母親は精神的健康状態が良い状態とはいえ、「自信」や「楽観視」「こころのゆとり」得点が

低い状態であると同時に、それらが心理的適応において重要であることが確認された。子どもの慢性疾患は問題解決的なコーピングのみでは対処しきれない問題であり、楽観視ができるような支持的な関わりが必要であると考えられた。属性との比較から、家族以外のサポートがあることは心理的適応において重要であることが示唆されている。今後、その他の要因とも丁寧に付き合わせ比較することで、慢性疾患患児の母親の心理的適応について理解を深めることができると考える。

本研究では慢性疾患患児の母親の心理的適応の一部が明らかになった。しかし調査票によるデータのみでは把握しきれないその他の状況要因が母親の心理に影響している可能性が考えられる。今後も継続的、発展的に研究を進めていくことでより子どもと家族の支援に役立つ示唆が得られると考えられる。

5. 主な発表論文等

研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

Ayako Ohgino, Yumiko Nakamura, Stress adaptation among mothers of children with chronic diseases in Prefecture A, 35th International Association for Human caring Conference, 2014.5.25, Kyoto, Japan.

Ayako Ohgino, Yumiko Nakamura, Susumu Yonesaka, Psychological stress responses and Coping Strategies of parents who have children with chronic illnesses with special reference to the difference between fathers and mothers in Japan, 10th International Family Nursing Conference, 2011.6.25-27, Kyoto, Japan.

扇野綾子, レジリエンスの概念分析、日本ヒューマンケア科学学会第 3 回学術集会、2010 年 10 月 23 日、青森市

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

扇野 綾子 (OHGINO, Ayako)
弘前大学・保健学研究科・助教
研究者番号：70400140

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：